

# グループホーム「ポランの家」通信

2009. 10. 31 N026

余市町大川町8丁目11番地 TEL 0135-22-1577 発行責任者 橋本武雄

- ▼ 十五夜と鬼灯(ほおずき)。ポランの家でも十五夜にはスキ・鬼灯・桔梗の花を飾り、お饅頭・スイカ・とうもろこしなどをお供へしました。
- ▼ 鬼灯。ユーモアとペーソスを併せ持ち、物語性を感じさせます。私が一番好きな「文字言葉」かも知れません。
- ▼ 浜田広介の童話「泣いた赤鬼」。村人と仲良くなりたかった赤鬼は友達の青鬼と相談し、わざと青鬼が村で乱暴を働き、赤鬼はその青鬼を懲らしめました。赤鬼は念願かなって村人と仲良くなれました。一人山奥に戻った青鬼は「友達の赤鬼にしてあげた事だ、これでいいのだ」とつぶやきながら、そ〜っと「鬼灯」を眺めていたかも知れませんね。
- ▼ 庭にそっと赤い実をつけている「鬼灯」をみると、何故か青鬼の孤高の優しさを想うのです。
- ▼ さて、北海道もすっかり晩秋の様相となりましたが、皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。
- ▼ 私も朝5時に起き、2ヶ月ぶりに森の中に入りました。勿論、山女魚釣りです。餌も、それまでのブドウ虫から「イクラ」に替えて竿を指しますと、からだをひねらせ山女魚が飛んで来ます。まさにプリミティブアート(原始芸術)の世界です。
- ▼ 「忙中閑有」。ベトナム戦争時代、北ベトナムのホーチミン大統領(愛称:ホーおじさん)は休みの日、頭の上を銃弾が飛ぶ中、悠然と麦わら帽子をかぶって釣りをしたそうです。
- ▼ 私は、一生「深い業」に悩まされ続け、このような心境にはなれないと思いますが、こんな生き様、憧れますね。
- ▼ それでは、全国的に新型インフルエンザが猛威を振っています。皆様のご自愛をお祈り申し上げます。

## 「たましい」の送り火

毎年、お盆が終わる時、ポランの家では「花火」をします。線香花火に映し出される入居者の方たちの「顔」は何か遠くを思い出しているようにも観えます。

お盆は、高齢者の方たちにとって、とても大事な「非日常の世界」と思っています。

お盆は彼岸のご先祖様・亡くなった方の「たましい」と、此岸の私たちが「交流する時間」。

最後の花火が終わると、何時も私は皆さんに「これで無事、ご先祖様のたましいをお彼岸に送る事ができました。安心しましたね」と言います。

「共に生きている」「生かされている」という感覚は大事な事だと思っています。



**地人協会という名前をつけて  
良かったと思うこと**

グループホームポランの家の運営法人は有限会社 地人協会と言います。平成16年9月7日、大安の日に設立登記をしました。まだその頃は余市にも法務局がありました。「地人協会」という名前は宮澤賢治の「羅須地人協会」と内村鑑三の著作「地人論」から頂いたものです。

先日、入居者の方のお誕生日に「チラン寿司」を作りました。上品な味の出来栄でした。

お祝いの席で楽しくお話をしている時、女性のHさんが、「昔ね、お祭りに酢飯が食べたかったの。でもね、貧乏で食べれなかった・・・」と眼を「ウルウル」させているのです。この方の生活の歴史は、私の知るところでは大変なものでした。まさに「土を喰って」生きてきた感じが致します。

私の家もオホーツクの山奥で農家をしていました。小さい頃は「麦ご飯」ばかりで「真っ白な米のご飯」が食べられるのは年に数回しか有りませんでしたので、この「眼のウルウル」はすごく分かるのです。私も「もらい泣き」をしてしまいそうでした。

私が農学部で「農政学」を勉強したのも、こんな理由があります。

でも良かったです。「地人協会」と名前をつけて。



ご家族の方から沢山トウキビを頂きました。皆で皮むきです。皮をむく時、芯を折る、折らない？茹でるの、焼くの？いろいろ流派があるようです。夫々に理由があるようで面白いですね。

**1年かけた労作です**



ポランの家のスターティングスタッフ、<洋子さん>が1年をかけて作った、縦1m50cm・横1m30cmの素晴らしいパッチワークの大作です。仕事が終わった後、想いを込めて一針一針1年もの時間をかけて作り上げた作品は「優しさの芸術」です。この作品は1階のリビングに飾ってあります。

デザインは、宮澤賢治のイーハートープ（理想郷）、小高い丘にある羅須地人協会から北上川の向こうに見える岩手山の麓、<sup>しづくいし</sup>磐石に広がる「小岩井農場」の花に囲まれた小さなチーズ工房のようにも見えます。



ほれ、ポタンちゃんと掛かってないしょ。オーすまねーナ。おせっかいを焼いてくれるのは良いのですが、Rさん、自分の髪が・・・

## 紅丸でイモ餅を作って食べました

紅丸？赤いジャガイモです。赤いジャガイモと言えば、今皆さんが知っているのは「アンデス」という品種だと思います。紅丸という品種は男爵などと並び昔からある品種なのですが、もともと澱粉の原料品種のため、食用としてスーパーなどには流通していません。

この紅丸を入居者のご家族から沢山頂きました。早速、茹でてつぶすと、「モチモチ」の生地が出来上がりました。普通のジャガイモはつぶしてこねる時、少しデンプン粉を入れなければならないのですが、紅丸はデンプンの含有量が多いので、このように「モチモチ」となります。

これを丸く形を整えフライパンで焼き、砂糖と醤油の甘辛いタレをイモ餅につけて食べると、まあ～美味しい事！！作ってくれたのは女性スタッフの皆さんです。

入居者の皆さんも「美味しいね」「美味しいね」と優しい笑顔になっています。これは、まさに北海道のジャガイモ文化と言って良いと思います。



七夕様。家族の健康を願う短冊を一生懸命飾りました。



敬老の日に。毎年ホテルで食事をしますが今年はインフルエンザが心配でしたのでボランの家でお祝いです。



8月の運営推進会議。委員さんと入居者の方たち一緒に押し花葉書を作りました。講師は委員さんでもある押し花インストラクターの村山洋子さんです。

## ある日の午後3時40分

2階のリビングには、早出の職員1名、遅出の職員1名、日勤の職員2名、看護師1名、私、それに4時から勤務の夜勤職員も早めに出てきて合計7名の職員。

そして、おやつ時間も終わり特に行事などもある訳ではないのですが、入居者の方9名全員リビングにいます。スタッフのほほを手でパチパチしながら「あなたのほっぺたモチモチだね」と笑っている方。新聞を読んでいる？眺めている？方。向こうではスタッフと食べ物のお話を話している方。あちこちで笑い声と笑顔が見えます。誰もばたばたとしていません。

私はこんな風景とこんな時間が大好きです。リビングのソファに座りながら、ゆったりとした幸せを感じています。

## ご家族の皆様へ（通信）

-----
-----
-----
-----
-----